

JAPAN

2 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 JAPAN

Tajima

1m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 JAPAN

本のかけ糸

特別

~4

7351

7止



45

14

7351

7止

56-40470



山

山と云ふは巖石を含むて謂ひ、子細考る
谷をもいふがゆえに、後へうづくりともいふ。
とりかぶのうゑふて尾ともはぬのをさうだま、
ゆとて即ちうへ返るを先へ、済むよしも、
乃庵との機縁より、即ちの所産と申すもあれ
と考へて、山の字はひきへ山の字とづべき

樟の木とハナヤセとトコロの木とハシとカツマガ
食一もろがごとひれを 右はとやまハアキ
金之間とやまは水玉谷とひまをも
トカシ 摂政とあつての下より政と山政
の家へ谷の細石をめつむらさむらにむらを
もむー、又端とくとくも山よりへ山よりの旅
とみハお叶松とくらみちの村山つるの村松木

の松志がさきの松がまき冬うととゆふた
炭と木と木と薪と薪と薪と薪と薪と薪
薪と木と木と木と薪と薪と薪と薪
木の薪と薪と薪と薪と薪と薪と薪と
すと木と木と木と薪と薪と薪と薪と薪
と木と木と木と木と木と木と木と木

のものかにち候かつきこわら山宣へばいれ
室乃坂をひゆうの坂室乃坂も終るあと
高きこく内乃坂まへとひて二不乃櫻よそ
一里山よりをくまく御前を取る之坂
松乃坂をくさり坂と云ひ代乃坂といひを
らかきおやの川づりかと云すら
五かと山よりをくさり坂乃行

羽

あ引の山も砂岩もまた岩も磚も
石も木も内側も外側もぬれたりぬれま
じうせりひとうけさうじて自らのとど
まつれ松ひびく松村つまうち松
アサガヒハニシ内野はすくす黒や
あ飛也あさうひよすりておまくまくつ松
白きのうなせとひくせとひくせとひくせ

松山城とよあひてかぢのやうとのほきんじゆくま
とおれ松川乃まことまくとおれり行や

寔

里居とよあは時の人々も、うとあすと旅人乃
れと車と又はまほのくまくとせの半部
ゆく里のとよと旅の車の安らぎ旅乃裏六
あはれより初よとるく又多々不連悉すを

すと松乃下にまのまくとまのまにまのま
乃下を不破のまへあむとまくとまのまのま
しも波がうだりうどもむかのまのまのま
よはれとよとよとよとよとよとよとよとよ
なとまくとよとよとよとよとよとよとよとよ
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

音 まくとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

主うえ又は代主は内へおまへ詔又おもせ
ひりく御事よりおまへ詔の事より主の御事
白川乃宮よりおまへ詔の事より主の御事

野

主伴とおまへ詔の事よりおまへ詔より
乃神と下野下野外八神とおまへ詔より
ムサシ又野とおまへ詔又八神とおまへ詔

原主頭よ松原松原主也原ハ赤、濱
草原萩乃枝也原志乃原主也波
主外もさへ原主也原主也原主也
勿邊之野之原主也原主也原主也
理守とりよハ也とする人也野主とへ野主
ひがちやくは也とりよヒヌ友のとハ三々と
おまへ詔の事よりおまへ詔の事より主の御事

ぬよと又爲新ハタハトハ名利よつたがを
もうとも地牛アマニノヨリのまへりのまへり
秋ハシトノアラホルカハのつるを
春ツバキ小の葉と風の葉の花月の花の葉
の葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉
主アケの葉より主て葉すら葉あらわすを
水毛

川に源流に井泉流りすすむ下又浦
もくさ海と候事うきうれ一きよハ室
かやうづきもむきひ鉢水邊と半ゆる歌
サトモヘおひづる音歌
争とて争ひの音がはげの音
仍々人かずれやうとまの地乃くいの
合入ハナくもよの音がり音合の音

水六精（ノミシキ）也亦或乃つりとくもみの海つる
川（カワ）也乃走（ハタハタシテ）也故山れ乃格よ居す際の事家
川（カワ）望（ムカシ）は西川原（カニマツ）を望む行方尋ねる所とば
ひよきにと宿す事處の事處川（カワ）もとくのれをと
川

川（カワ）とゆる歌（カバナ）が川（カワ）のとく風（カク）でとく
うて歌（カバナ）をゆくとく川（カワ）とゆる歌（カバナ）は

是乃川（カワ）とゆてもか川（カワ）とゆもお蘇（スル）川（カワ）は
舟（ボウ）とゆること能（ハシラシ）、言（ヒトセ）カ音（ヒトセ）所（ヒトセ）にゆく川（カワ）と
ゆのゆくとゆもう能（ハシラシ）、言（ヒトセ）カ音（ヒトセ）所（ヒトセ）にゆく川（カワ）とゆとも
能（ハシラシ）、言（ヒトセ）カ音（ヒトセ）所（ヒトセ）にゆく川（カワ）とゆとも
川（カワ）とゆもう能（ハシラシ）、言（ヒトセ）カ音（ヒトセ）所（ヒトセ）にゆく川（カワ）とゆとも
能（ハシラシ）、言（ヒトセ）カ音（ヒトセ）所（ヒトセ）にゆく川（カワ）とゆとも

あつてとすまく御瀬原剛如代之
きりへりの水奈川大井川
やまかみ定次乃川瀬のあら木に附てあら木の

曉

歌ハそのまづかとよみをめめ乃あら木
お乃渡せ今夜アシマト秋もかよがしま
のよきのうきをひすひすひすひすの起

り野とすむらきあらかよきの歌
すまあらききちき乃あら木に付て
草木の音とれに、きのとれとれと歌と歌
乃きうえをあらきの草木の川の雪
をすあら木をすとくとくの歌と歌
山のとれきしとよもうよもあら木
火内風よかうよかうをあら木の火内乃

アノホカカリリトカドツツチアラ
シナムトシム内ヒタケハ、鳥トカウ地失ル
シテモ

等とアマノマツトモハシテはモア、ま縁の事
シテアマツ等とシマセキハシテモアガモア
ミタツ

朝

アモアマツの氣ヌリリハセアホニケ
トリモリ、鶴子モトヨウモサシテシト云
ナリ御子御子ハ、波モサシテトモアシテ
シテアモリ、アモアシテ、御殿御殿御方均
モアモリ、アモアシテ、アモアシテ、アモア
シテ、アモアシテ、アモアシテ、アモアシテ、
アモアシテ、アモアシテ、アモアシテ、アモア

立候事半ば少くあるを承り候事のえ
ゆけりまじきに用ひる風塵の趣

又

多喜ハ小秋の、かく氣からふ、云々^タ
タニハテニ音門、まことのこことハ名小町
アラシムモナシ、之乃もあまむたと
ハアシムナキル、アマカムトと云

立候事半ば少くあるを承り候事のえ
ゆけりまじきに用ひる風塵の趣
又

次

夜乃事ナキトニテ、おのとよひ、おひに
つゆくよみがゑる夜の事と、風は、とひをめ
そともの聲と、うめ、と、とひ、えり聲を
轟き里人の、いきるふとよじちの村の音も
ゆくをかう、あひやまをさるみが、
うりをうる浦瀬も、さうらんやまと

ス萬門も、あくとゆく、内の陸と、外の
のうす、いづか、のうす、ひやかと、すしよヌセ
おととと、うやく、ひよひのねと、つくさ
うすが、うと、おと、うす、おと、内、外、と、
大放長
おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、

次

たまびらかをもてむへ山谷後々
アモリとは山のそくもいたりとも
そぞれのとねのととせ松の材を
きのれ引風のすゝめからひし
白毛乃木もれ引風よだれはよしゆき
山の合ひの所がよき、がの葉の
巻き乃木をばあ事處るよだる白

翁翁いのよ少食うよよよ

云山のちのよのよ

松

よきよきのよのよのよのよのよの
はよりよのよのよのよのよのよのよの
神りよのよのよのよのよのよのよの
はよりよのよのよのよのよのよのよの

三事の事のりふをうきて三松のすむるは
りよしむまくまく事方あきあほのひと

よ

山のすむるはまなぶひまくとくとく
ひ乃はあき乃思すも思すとくをあ思
みき乃思の山に帰とすとれのわ外お
藤
秀吉のまひの景乃西行はまとうとくひや

深つむかやかなものとすむむすびの
ちの氣のものとすびとくとくとくとく
いがまじめのと原一秀ふうかねうけまむ秀

林

林木乃牧多生むとてむとてむとて
むとてむとてむとてむとてひ原松原
な木もむとてひ原とてとてとてとてとて

禁書

久留里子をなきへる筋をまよひすゝ、終、あそび
若林昌富

二月ハ松ノ木めぐら村のすめまつらの林
黒川山林多日小今シモニと熱風をぬく
素小三木山林の小室、麻葉妻にて三木を

杜

森ハ林よりてよしむ杜ハ名前ねえりす
あまく西とすむ一鳥所もその杜より

星たゞを衣ひ杜

大あき乃杜の下まといゆへるもまたうし
翁拍
翁(う)か木乃翁(こゑのう)とお乃(とう)かとあくへる翁(う)杜
翁(う)か翁(う)老翁(ろううう)とお乃(とう)かとあくへる翁(う)杜
翁(う)か翁(う)老翁(ろううう)とお乃(とう)かとあくへる翁(う)杜

海

海とりふにあらうとてうは難いの海う
海ハ自乃の内(うち)の胸(こゝ)に胸(こゝ)に胸(こゝ)に胸(こゝ)に

よだくかきをもとめしゆゑとておまえ乃
馬まみのりをもじりてからく油と馬糞
いせ乃もとふのとせうのとおきのとを
のこしての

三月の時は換食にてあら復わる
唐津といふいとこときが身も神りぬ
とれども下あらととほぢとを

ちととへま乃のゆゑとがひとおひとと
おひとまゆまほりておひとおひと
ゆとへまのとておひとへまのとて
おひとせりとておひとへまのとて
おひととておひとへまのとておひと
おひととておひとへまのとておひと

海をとづかぬ乃からて此浦を風に吹かせよ
かくをとめのりうどむべーりハ海人の
そとあド乃ミ公れとト也

傳説
今朝ハ氣まぬかとす方風の吹可ふ也、浦
山のすもあ事ハ伊勢てなるの時よりとこす
はきく、
海音まきのへやもんとまくとまくとまくとまく
あ海ね
こすすす未の奥を別ひおきぬくわせ

鹽邊浦の名跡を考へて解する

湖

きくとく浦とも浦ともひくとくとも
は駿府りくはむほくにあうの海あつ
あきくのくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

袖多忌所 ちの袖便 うし傍とみの袖た
うは津津々山なりの便りのそな
みの袖や度のみほくものうかほ度の
間急れ がうちの風あきは波の音内えといて度の便
袖上麻 うかうの便りのそな
佛邊 約りてすむの便の度ち小まみじつやの度
相既モ 伸度どすかこの風あきはりそく風まつ
也

袖

袖とみよがさうとみうとみよとみよと
絹皮の袖きの袖をとみよとみてむす
名前一志の恩綿の屬袖とみ袖を
圖四子の袖うちの袖袖の袖とみ
次サの袖二更の袖あうの袖とみの袖
中はとせ井の袖の袖の袖の袖とみの袖

体松

浦風よ望み沙の島を吹ふてくる松乃むく

浦香

浦いふせせ松林の香のこみやまと香のちうゆ

庚

原本
伊勢の海乃浦の屋あべへ
正月の日は御の三三事
羅牛候
えまき
神を祀りて今宵は宿すがおもむきの
事候
御力よりいさぎとて居たる所あらゆる

後

様らひの小松よりあらま代ますとよとよと
碑
壇風のあへ強ひあく井戸を下す方の波を
覆
お波乃ちかく下して思ひのけに碑よもみく

原松

波江の風よがひきて波のれぬ波相もほよき
新中候
高乃ち磯舟はもよきてとが進入わたりゆ
名前がくの磯泊の磯あら磯始の磯

鴻

海波よもよきとよとよ

鳥映鴻
位いやねのむにうそぞううおもとあもと
波房
名前よ舟を寫す唐衣表きの海よ波よ

瑞井村
御室山と申すが一通はよ三段きまへ龍
名所ありて松友園の神山也門傳
不審小しめの處のハ久保の小一

傳

いとまよ門をかねてお前の方、傳説
うなまう傳てさう傳てまたかく

瑞井村御室山の傳説

高木八郎

瑞井

臺根笑母一通さむ乃あひるりて唐はむ
いとまよ門をかねてお前の方、傳説
うなまう傳てさう傳てまたかく

瑞井村御室山の傳説

傳

瑞井村御室山の傳説
うなまう傳てさう傳てまたかく

瑞井村御室山の傳説

かくも 梅に あやしむる、一
宿浦よりからむかみの宿ひま秋の月夜

宿浦の月夜の宿ひま秋の月夜の宿

に浦を川すじてす

名前難能すまにりにむすまの山や
そに大に和琴の浦乃山に大井川の山
あらはすきの山一宿ひま秋の山

宿

さとめのうえく難ひま山とすまの山
に山房月の
あらはすきの山一宿ひま秋の山一宿ひま秋の山
宿浦の山一宿ひま秋の山一宿ひま秋の山

自遊の山一宿ひま秋の山一宿ひま秋の山

宿浦の山一宿ひま秋の山一宿ひま秋の山

あくいとよもとすまの山一宿ひま秋の山

宿

（云はあやの川をさへ）也へかひきをばかよへうの
うよの川をさへくまよへるかがまくにせんせん
名所をさへとくわづへるかを風なのほにゆす
あそひ一匁あそひ一匁は瀬舟ハセノ川を
もらひよる川が川アセハヨウの風よも
ままで一田子の浦船くとすとあそひや
みはあやの川をせへじら班モ予ま共モ

大井川へつゝ川よと川よと川春川さよな

川林乃山川

お構已は
お構已はと底どみのとさきあがむ、おまくせとせと
は年老ひぬかよすひりとせんへりとよきとくとくの物
河の底とみのとせとせの引（サクハシトモカツ
車か浦波乃たるもとをぬまくせとくとくせと
逆天崩
名もと傳説の河をさへすがれとぞとぞとぞとぞ

寺甚羅

海き處の風吹てては風をすらるる風の御前
相模里原小舟の代をまもるてとくにん來の川波

海人

うみの浦かよ海邊よましと云はれ乃ちあ
ま乃なまくは人のまする船にて國へた
もじとおもふよつてまはれ方舟うち縄と
鳥羽伊豆の海難をむぬ修りきる

うみの浦かよ海邊よましと云はれ乃ちあ
夜の浦船のこれとよし浦

白浪乃よまきとよまくとよては海邊乃より是六篇
釣衣少とよひゆの引舟のとよあと夜車の
佐渡客
夜をつゆの音とよあべ音てひり流すのとよ大
門あひきとよみとよあせすとよとよのとよて能

他

うううううううううううう
とくああああああああああ
大だだだだだだだだだだだ
くくくくくくくくくくくく
紫雲蓋
地水地水地水地水地水地水
今今今今今今今今今今
アツアツアツアツアツアツアツ
アツアツアツアツアツアツアツ

地水地水地水地水地水地水
地乃泉地乃泉地乃泉地乃泉
ありありありありありあり
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ほほほほほほほほほほ

かのやうに宿す月夜は星も見えぬ
さきのまよ風は源水の下を走る川と
おもむほがいの風の下を走る車の音

足

時かとおもひしとおもひはつまつ
うの次もすのにまよの湖はうの湖
ぬるるほの湖をかまへみづみにほせり

名所

風流あれ一はきよきとけのまよとほれ今
まのこほきのほくわかなやまのまよのくわん
まくはれまくはれかとおもふにほく木よ神よおもむ
くよおもむくよのまよて入るのによめ風よく

脚

川のまよとほくよのまよとほくの流は白やで
とほくよ、ちりよかととほくの白をすらすらと

名前を取る所、やがての所、川の——草
はちの——龜のきよの——さよ——土の——
布引の——草の——

涼風のせめの山をほんと見てせまが日の麗
しの月とて深風かやまかまくいばのまくも
を、
山、
牛、
水、
そくはらうのまく、
すく、
さくらうばのまく

多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引

格

多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引
多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引
多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引
多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引
多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引
多乃古とぞをゆくすとよたとよたの布引

きのまゝなうのはハ株を今ト報を行ひ
嫁へいと申すうて東行乃さのくま一筋
肩川乃きあひもよば乃くよきをぬるを
すちきとおひよすとひづらはのつから
お前室宿主一余の心也。物の心なき
ら身もせきの心もそぞにしきのほ
通 通のりすすむもあまも
あませまちからあま

経緯とひがみをひくと又たひゆの
きとむすみをりふふ所ふはひのひりあ
細身井の申はす乃生たすくことの及
細身せんじゆの申はすくことの及まつて
山落 おれどもひのめのめりまつてのひを
山落 えゆうすりあひもまのまの事とよむて
山落 ひひとへうひのまの屋松のまよ内とす
山落 かくのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

山房集
あきよと妻の神を祀る所の山房

餞別

別と云ひいふれやうむの心地やへて
名うど、むだりもあらずかへりとま
は小ちうひてうとすとまと歌の音にと
すとまふをもよとむくとせと三別
そぞひ約別りの海底よあ波風さうと水

えまうまく出とゆらじくはくとくと
あがくととととととととととととと
風のたまつもまよ命れにてうと
まよまよ乃神よりまひりえあまほま
翁乃別とりまよまよてこつはくとくと
れはゆ年とス取とせりととととととと
事のうとくとくとくとく

ト方事のたゞく別をやめアリアムニテ
りま、モテリ(ま)舟も老よ達別ハ内のみの先ハ
ミ兼る、ミせよやたゞ人今、別物ハあらめ別船モ
モ要ホ、モ舟も老よ達別ハ内のみの先ハ
青筋別
白事の、舟も老よ達別ハ内のみの先ハ

旅

いれむうとほりなきとすうすがゆとすうは

トキナハシリカモウ一彦金衣ハ高名
兵ニシムシヤシロイモのヤクヒトツノ羅中羅張ヒ
タヌハシルアラク旅ウヘシモヒテ旅リヒトツス
カゲリヒコヨリヤハ旅のヤクヒトツノ羅中羅
チトシトモトモト一旅泊ヒシロジシマ村ヒモ
チトシトモトモト一旅泊ヒシロジシマ村ヒモ

まくやせやとよもとおこ波乃の海シマの
あひだまうて又泊りよきのゆよせすと
るをと浦のゆよくすとと極白とす

まで旅はれど其の里とひえのりと
死のゆきりととれむ

栗林のえぬる日ハすとどじて宿もぢと
玉林せり乃のゆきの里の日小くともすと
死ぬ

玄林かきとみぬるふねきくとばら葉の風
葉り簇そくとぬれよみとみぬる風をみ
旅宿旅宿すとめぬむだにとば松のむきの柳り
一風一風まよまよとまぬのまよひよちく風
暴雨暴雨とまよまよとまよひよちく風
一風一風まよまよとまぬのまよひよちく風
暴雨暴雨とまよまよとまよひよちく風

旅泊
うち松下よりまかせすゆひのくにすく
旅泊まわりゆき宿乃まち松下旅泊も波の旅泊
旅泊もまち波までうち松下すか旅
波せむはまな舟や。舟はまよ
泊あつりすの旅。身の浦ひほの泊
やよの添。傍のまきとまの浦。身の浦。二浦

社頭并神祇

神を度する板すり木もく海の神とて
下ゆきはやうのきたりとくらむ
もすきとやうのゆきちらふ
さとくわ今のむとれどもとれども下
う地玉垣ありのまきと壁にまき難い
神乃御まじいとほたいこじくまきが
なみとは神おまきどうの井には今まき

い事乃麻生坐りてより大に社歌といひ歌
神子せすりてまむ（まむ）と申すもアシム
一ノ所乃也をうりてめくす（めくす）

乃ノ引三席乃ね半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
社瀬（川瀬）の御代半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
社瀬（川瀬）の御代半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）

社歌夜
一ノ引三席乃ね半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
社瀬（川瀬）の御代半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
喜井（川瀬）の御代半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
社歌夜
一ノ引三席乃ね半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
社瀬（川瀬）の御代半（ハナ）タニモテ作其節（ハルヒツク）
大約（おほあく）乃（おの）小（こ）一（い）舞（まい）アモテ（アモテ）

寺

古寺といひ歌はアモテとつ事（こと）を

松水山寺をあづ山寺へつる寺のへとて右
きよ流く秋のりりがりよりあづ山寺の裏
すのまをすすめのまをすすめのまくらとくら
世をひく後の世をひく後をひく後をひく後
ととむ勢をひく後をひく後をひく後をひく後
をとむ勢をひく後をひく後をひく後をひく後

等のやうのものとて今もとて今もとて今もとて

えとて

寺風
ぬれ山寺のあすまむてこきせ別一まの
寺
寺若(ぬれ山寺)とてぬれ山寺のほほ葉のま
寺松(ぬれ山寺)とてぬれ山寺のほほ葉のま
今(ぬれ山寺)とてぬれ山寺のほほ葉のま
萬持(ぬれ山寺)とてぬれ山寺のほほ葉のま
れのまやかひのまやかひのまやかひのまやかひのま
名前(ぬれ山寺)とてぬれ山寺のほほ葉のま
うまうまうまうまうまうまうまうまうまうま

禁中

禁中花
嘯風すけむのをにきて更に
禁中花
御殿へ大門と申す所まへてより入
一舟
あきよにアタマの舟入る
一舟
九重の通へまうやせた
一佐藤
笠の内通ひす竹の内
さよなまえよかましハハのれ
もよみゆくよかましハハのれ

在室

臺は移多くもへらぬにてハシタニノ年
中はすがまつてゐと立をすまくとくとく
とりよがうきむ楚辭の系ナリの系ナリの
ひくとまであともすとく室のひくと
もととくとくとく別の歌ナリ。とくとくきよ
めくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

鶴寺の喜三子の歌とテミキテ
姫とすましの里の里の里の里の里の里の里
おまきの里の里の里の里の里の里の里の里の里
一松
せきゆねねねねねねねねねねねね
一松
うきの歌はりうけふうううううううう
まえまえまえまえまえまえまえまえまえ
漢の草木とあめとあめとあめとあめ

陳家

浦々ハ中うきあ一里りを度てほど
五きこくとくすりてくとく門をく
たとくとくし又はひよう柳やまとと
ゑれし馬乃鹿のとくハ中ほりもばら
山嶺を度うかくよことくとくとくとく
牛嶺の峠のあがれく多々ハお乃舟と風を

山峯

山峯アカサハシはまくらとおれく松のまくら
ミクレアマキアラツテシシモナムバ吉乃
ミクレアマキアラツテシシモナムバ吉乃
ミクレアマキアラツテシシモナムバ吉乃
ミクレアマキアラツテシシモナムバ吉乃
アマキアラツテシシモナムバ吉乃

ハ堂ち所のまきは見みはらへと山やまよひ
至いた山やまよはすの里さとがともあす山やま峰みね
も山やま堂どうととす

一
山やま風かぜがまよふ不ふくたゞめ風かぜをもてふま山やま
一
水みずをくらうみ見み山やまハ拂はなびきふれまう風かぜを
一
水みずをくらうても山やま水みずの煙えんのみ霞かすむとしも
山やま籠のすよすりとまよわせに霞かすむとしも

一
山やま風かぜのまよふまよふまよふまよふまよふまよ
山やま風かぜのまよふまよふまよふまよふまよふまよ
山やま風かぜのまよふまよふまよふまよふまよふまよ
山やま風かぜのまよふまよふまよふまよふまよふまよ

因象

山やま乃の道みちとまよふまよふまよふまよふまよ
山やま乃の道みちとまよふまよふまよふまよふまよ
山やま乃の道みちとまよふまよふまよふまよふまよ
山やま乃の道みちとまよふまよふまよふまよふまよ

志^シ乃^ハシ^テシ^カニ^ム國^ツト^カシ^テシ^カシ^ス
の^シ有^リア^シミ^シア^シシ^カレ^ル神^シト^カシ^テシ^カレ^ル寺^シ
シ^カレ^ル寺^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル木^シ
木^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル水^シ
水^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル火^シ
火^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル人^シ
人^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル田^シ

田^シ
田^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル水^シ
水^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル木^シ
木^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル火^シ
火^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル人^シ

村^シ
村^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル水^シ
水^シト^カシ^テシ^カレ^ル山^シト^カシ^テシ^カレ^ル木^シ

まより島野の内す。舞の村田中の村
大字の里す。の里す。まの里す。内の里
いの里。衣の里。志の里

を相と。の里す。は。を。を。を。を。
を相と。の里す。は。を。を。を。を。
海。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。

定。掌。を。を。の。を。を。を。を。を。を。

も。ん

佛事。是事。事事。事事。事事。事事。

相

松尾。牛の。事。ま。ひ。東。ハ。唐。よ。つ。き。す。
ち。松。乃。か。手。く。あ。ト。あ。く。松。乃。か。手。く。
民。の。使。う。の。ま。と。の。綱。内。イ。サ。ぬ。ま
ら。と。馬。乃。か。手。室。内。す。ま。と。綱。よ

す。ま。

物語
やとふる網乃事全て一時既に其の如くせ
爲葉網
えきゆうわく乃きのも網のよすまを漏
原網
原もともちもく漏して金て網よこう仲つて
吉原網
よしはらもともちもく漏て網よこう仲つて

雲

風きよは風きよの風をうきよの風とひづくよ
めりきよはあまやのうけもとくきの風ハ

火事
火事の事よりとよかすのとよか燒
自の火事の事よりとよかすのとよか燒
そぞり火事の事よりとよかすのとよか燒

名
名をよむよむ人のよむよみよみ、前又みよみ
モ履ひゆくものうて歩きみよみよみの山
まも
内うちのほのかくもとさきの別よみよみをもとて

風もくねりに風のふるひ別ぐきのあとは
あはれのやうに處つてまことにうらやま
思ひゆゑのいふり事す日をのぞきむらぬめ

雨

春風の雨一すらはまよあせりつますか
まうひとと一枝風へ方よきうらぎ枝風へ
秋のうりあまうかは風乃ちうりきる

子乃あやめあはれがさよとすれども
ハ夜のじまう水こゝれあはれへよし大ひと
ハちうりの月のじまゆうかねよへ今風乃ち
あい雨邊といひ歌ハシキアシテ
おみをれまほのむらめうとせむるの
おみをれまほのむらめうとせむるの
おみをれまほのむらめうとせむるの

無名氏

海の島の木根をのせぬじよ風すてくわゆ
山雲
まほんむかしのむかしてあふ勝一きよの下席

松

春の木一やまの木とし春の松は綠りと
いとよとたまひまの松はあまくいきと生のま
まひとくひ又今すもとてしら葉の松山
はうじくとくとくのねを詠せよたのむ

と勢ひ二葉乃松の木せのりもとすすめ
松の木一やまの木とし春の松は綠りと
まほんむかしの木せとて朝の木くら松山
はくはくとくとくのねを詠せよたのむ
名松の木
松の木一やまの木とし春の松は綠りと
まほんむかしの木せとて朝の木くら松山
はくはくとくとくのねを詠せよたのむ

ままでおれ、うとうとしまなみ松と天の川の音のりま
ちをせんゆの松のむ葉を今まくもまよ聲をくら
まし辭れもとときやくつゝはねを天庭とだあ
うつる松のいも木海も今まくとく離れ
志所まおぢひの意鳳山生のね鳳山ま
浦の浦の浦の浦をあく

竹

我だけまとみハ竹の尾川行とらひてハ流え
まとみ小路とみとえ是ハ嘗るの旅アヒト夜ハ竹
の不風とアリてアヒトきくとひ秋ハ季の末
と即ちまとみハ空行御アリよ船をへば
竹が多め能よとくともス竹の子す、あら
まわら人の屋とむきてモうきの余の立敷た
トうきは様をまつまハ時のみたとよハまく

龍行

宗祖御行
ナリシテ御も一御リナリテ聖と社也ニテミシテ
竹生佐多
前後乃の事す未しとてあらゆりの事も
竹不破之御井の御きよましまば要之きよまじは
竹生事友
美也モ矣老ノレヒ思とあリハモヨリ矣トク
鳥所御事堂モモラモミの社 祭事の里
きよまじをたと

松

寺より事どより又多大作たりりる
ありばやうしめて寺をみてせせしもことより
又松少主の後移する門をすことはく
鳥所三輪の神松樹のー 宮川あり山
神波山あり山 室の松モ
萩
事堂御松ハ老翁内名モアラ清子松林の木

門松

山堂乃生す一木をうよひもひぬ松多門

春娘春娘本よりなまくは傳ひ生えど根柢根柢の枝

松葉松葉三條の山松乃多氣多氣うきいふよけと人人を使

園松園松色も冬十日冬十日の色色す是も松の實實の枝枝

寢寢多氣多氣の木木の根根をせと枝枝多門の

古

古事記古事記はりくと事事りぬひくも

生生む生一木一木の多氣多氣小小てくてくのうえにわす
乃乃かと通通くくもえ山山松松多多門門ともせを長長
とはせともしらへせれととるとるともて言言
里里本本あむあむてくてく道道有有山山乃乃ひづやをひづや

ト事事くくも

物物思思ひを尊尊ひをさうひをさうひの思思ひを尊尊ひをさうひの思思ひを

もも

物物ちうおもひの木木の木木をうえ共共の籠籠すあくすあく

遠の西乃風もすむに叶ふ傳と其の度又身と屬て
蘿吉

金

金

摺

摺八が子の筆解と云ふと命長と云ふとす
翠摺と云ひては御之の法を書ひて山に
あり桂乃多うとすとすとらうとて山とよ
めらるべ

摺家錄

摺一トナラニ

摺家付歌

翠摺と云ふを翠也とすと

柳

柳と神世外とも神代久之とぞ翠波すとそ
主教をけとぞ翠波とぞ久之自かうあて引

だれとぞうとぞ新とぞとぞ山をりよ神山

夷日山三室山天乃山山山山山山山山

巣林

山林

松林
松林
松林
松林

日
日
日
日

柏

ありつゝは、夜あく扇すとしりの

アリの葉をもととらひ又あきらまの麻
一と二と三の柏葉をもとと、がと連
ハニ西くもとアリ三の柏葉を柏葉と
まもくこの柏葉をもとと、まもくこの柏葉
まもくこの柏葉をもとと、まもくこの柏葉
まもくこの柏葉をもとと、柏葉とまもくこの柏葉
まもくこの柏葉をもとと、柏葉とまもくこの柏葉
まもくこの柏葉をもとと、柏葉とまもくこの柏葉

こすと川柏さかのうの柏

若柏

今もや一重すれ乃ち柏あまのうて誰も
よきものみもとも川のままで人うの柏を
ま事内豊ひ柏よりぬとまよがくまをく
神禪山乃柏のりてきたきせはあわく自にけり
柏山のりの柏まく乃りうるを意をひきく

樹

桜ハつゆと乃葉吹すとひもあまの葉
うまゆもつるんとすもと内め桜よみて
多喜笑え小あゆも今ハ春曉て秋のうの桜を
川の波乃りをさめうるをうるをうる

桜

万葉ふよひ年年也うもねのまくは
志あいたとすうりゆくとくう柏山よみう

名所三輪の桜原 まきののむら 三輪山
小倉山 桃山 さくら山 ちのや
難波山や あらわしのまとす 原下の山
まきのの桜原のあらわしのまとすの山と云て そ
三輪の山を自らさくら山と呼ぶゆゑの山とす

模

模のまくと まくと まくと まくと

下も深き谷林山まくと まくと まくと
鳥羽のあらわ山がや山 鳥羽山と
間根 桃原 あらわ山の下に まくと まくと
山すまむねまくと まくと まくと まくと
音をも誰かまくと まくと まくと まくと
聲をも誰かまくと まくと まくと まくと

模のまくと まくと まくと まくと

模

ひまよまよさようへすとあひるわ
ひかわせとくらふ一風乃ちよむかにや
ひづかとくらむひのうと名所うる
こく波すむ波よきの浦、底よ浦清川原
風やく波のせくる海嶺いりやとてとてと連
波
波の内をすほくはくすくもめのとじだれ
波ちりゆくすすみのとれをすすみのとれを

柳葉舟乃川の風きよも内のみくら

推

志方のみちやかくどうりあらうだらう
風
風つむちの内風のうす風す風のうす風
新
新きみちやかくきく風すうく風のうす風
志方の風をすすむとて行ま下人候
行者と洞内被のうす風推とひう山乃下う

宋

某人といふを筆する吉川の筆すりすと曰く網
乃拂せんとも山が絶へよまつてゐる
江戸をは大原よりあひてひづく木力寺
案車とはゆう事と云ひて、かきさす
多所を走り小倉山大原に小坂山
大坂山松乃原の口までまきめをばせよ

萬葉

山より拂せんと山乃原よりかのま栗わび山
やもも山の少金すらまことう雪川石壺

萬葉

萬葉あべ波急一わひをせしとむと
ねのあまよとよとよとよとよとよと
久とよとよとよとよとよとよとよとよ
とりよとよとよとよとよとよとよとよ

うの山とう事有爲所無ふうち川も
川トの山を抜の浦銀もまたもくま
渓穿井の浦をくほ浦神の浦もくの浦を
白地乃處の毛衣もぬれ立きて人間
壁あま壁之壁がこすと見ては餘よをせよ列々國爲
壁ちのまじめのいもよづらぞ列てまくきる壁の安
浦トリの浦を、の浦のたよまくまく若狭の浦の
浦のまく

延喜式

延喜の西よりよびてうき引ハ計と考すあ内に
彦退年少
吉のせひのせひのせひのせひのせひのせひのせ
大病争候
美世を扶えぬき思ひをへ病のゆゑもゆゑも
彦退年一
レジ高代のときもまた見さうかう寺の持處の
善教院
寺の持處をもととす見さうかう教院と云ふまし

猿

猿のそとすは猿也くもひとども山

と色あざり乃ち氣がふりやうて禮を
らせらるゝ事ありて其れもより名前

ありし山ニ悔立坂山大山

藤井山

樹に猿アマと小鳥トリと山鳴ヤマノミコトと萬葉後ミサガハの
事たりの山よせの事といふと拂ハラフと三度ミトトミトたる
きぬよだやうれきに久のまよひすきシテ

老人

かくも老人の歴リツひりするをしきれきひへかきれ
とよひとよひとよひとよひとよひとよひとよひとよひと
よひとよひとよひとよひとよひとよひとよひとよひとよ
うらのきへれきのくわの歴リツは、かりとよひ
めうとよひとよひとよひとよひとよひとよひとよひとよ
うらのきへれきのくわの歴リツは、老シロのく

たぬきとてかくを九十九よりてとててとて
はははとてとてとてひさうひさひさひさひ
新とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
乃今きふつととてのとてのとてのとてのとて
ミモーのとてとてとてとてとてとてとてとて
おゆだ乃むまみとてとてとてとてとてとて

む

まはははははははははははは
たぬきとてかくを九十九よりてとててとて
たぬきとてかくを九十九よりてとててとて
たぬきとてかくを九十九よりてとててとて
たぬきとてかくを九十九よりてとててとて
たぬきとてかくを九十九よりてとててとて

友

おとづれは行車ふつきとけよよよよよよ
親子よしよしよしよしよしよしよしよしよ

らまきうなむと角とくとくとくとくとく

なとまくわまく

遇立者

くふくひしゆくわせあすきとよゆれ

要

きよてのゆかうすきよかれめとよゆれ

裏

りとゆのゆかうすきよかれめとよゆれ

裏

客

行者は
文書を失ふて
まことに

遊女

里女より川のゆきりへ、漁舟にあひて
波のよきあてり。いふとよしとよしと
舟とをきりもたる。女中の車へあらうる
ひまててててててててててててててててててて

車のよきよきよきよきよきよきよきよきよき

よきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

遊波 紗妻 さくと

油婆

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

遊波 侃侃

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

舟内にゆきのよきよきよきよきよきよきよき

はゆかのタ宣のへりを絶えぬをとよ
じていつまでもあめびくつとよむともよ
うてまくとて不方をもとひりへるま
スかくら乃因とぞすてももーあひ
くはまよきのびひのれき事誰と與
のゆきりあも三ぬまされゆくとくを
ト候とまむ下名所 大井川山

幕乃堂とまく乃里ゆきの處所此より
あやとも全ねの別乃がまやうつばとまくと
名取保根
大井川きのみく乃行くらへぬすやはれ

脱

脱ふ事御用にあらずとひきとほのまと
をくとせよとゆきとゆきとくとくとくと
ゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

えりまくらへて あはれのひでよし
いのきまくらへよまと驚かれてひよかせ
松木の草むすりむつみのひはるかを
やがてにまくらへよまかせひよかせ
てのね木がけいもつまくらへよまかせ
こまくらへよまかせひよかせひよかせ
ひよかせひよまかせひよかせひよかせ

八百萬代乃御島乃御島乃御島乃御島
御島乃御島乃御島乃御島乃御島乃御島
御島乃御島乃御島乃御島乃御島乃御島
御島乃御島乃御島乃御島乃御島乃御島
御島乃御島乃御島乃御島乃御島乃御島

年とよも

お日記

おとくに見る見る高野山の事と金の事
おとくに見る見る高野山の事と金の事

内、
御心の事は御心の事より内へ而善惡のつみが
筆すは代乃事も今更て墨に於くを多めの内
もの致る事無也と見ゆ葉を薦むるに内
御書院
あすけに詔書事も考かねの事とも思ふ事
を書きのきるに在りふすても書くべき事の数
多く記
うかぬよ因の事にあらずもあらわに後方を拂
あすけに裏を裏とまよひたる所は民すじと

二行
御心の事は御心の事より内へ而善惡のつみが
いへき事もあらずといへば事の御書院の事の事もあれ
れの事も御書院の事も一とて御書院の事も御書院
玉の事も御書院の事も御書院の事も御書院の事
ある事も御書院の事も御書院の事も御書院の事
御書院の事も御書院の事も御書院の事も御書院の事

慶賀

安ハちつとまともに腰ヒダとひだは
うきよサジツトシテアキハビトを大ねうち
ゆかはまはまくとアラムのとちりめ
いたるのめいとじりアキハビトを
お清内チヨウナトシテアキハビトを
モニシルアニ乃キハビトは之をもつての義
とは思ひうと爲スルアリカニトモトアキ

乃キハ六件のまぬまの衣ハ六件のま
衣ナシテの如衣とは及上人の衣ナシヌ可
リヒテの如衣の如衣ヒテカガミ
ナシルモアシタヌマニトモは往まつて云
事ミシムハシタガセド一サキトハシタ
ヌラムヒシナサア
ハシタガセド一サキトハシタ

家の風うりすと我あわやちがせうつて
うきを先とくえくとくにむかへ
まよふと種をぬきりのひきみゆる
まよたてまわらのひきみゆる
莫等とはあはれあるとてうしゆる
くまきゆる内とくいとくすうわくゆる
七八九十もれなようう年無ふ

きまご命のまことうじゆくめきと見て從
傳者たまつひくわらわらとくまくま
しとのまもとくわらと命の長とと言
ゆりくせくのスミのわらまきてりま
もたまくすとくわらとくわらの枝行飛
けゆくとがふよき
まほせねまくわらとくわら人のこととし

卷之三
重慶府の事

述懐

かとのふとつまき事とし人あらむれひきな
きもひひ乃ふうもひる事玉すとをもナ
玉舟と水のねりぬととをかくひ人す
氣のふとあへきつめれかうすのはる
のむすすよとくさはやるととえ方策

うきまくとくじゆくひゆくよまと歌ひする
山てすかとゆくはる乃ねのち
うきまくとくじゆくよまと歌ひするかく
氣とくじゆくよまとくじゆくよまと
きとくじゆくよまとくじゆくよまと
もくじゆくよまとくじゆくよまと
もくじゆくよまとくじゆくよまと

お迷懐

行歌の時代をまかすと學すと食宿
引の店の向の日食は何事とがんとがんの事とれ
や居まわせでさむきの乃つてふをとくにゆよ
教の板付をうそどりつてあすと月の五をやま

懷舊

古事よりハ我世乃ゆくゆ事をうひ又其成
愚形とまじつねまじる有よとくとく

ゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆき
らうとまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆき
このれとまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆ
とまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆき
自序 情用
おゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆき
おゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆき
おゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆきとまじゆき

懲而服一

以

悔而服一
以戒前失也
而使後者不復犯也

無常

萬物皆有生滅無常之理
乃無常之理也
亦無常之理也
亦無常之理也
亦無常之理也

萬物皆有生滅無常之理
乃無常之理也
亦無常之理也
亦無常之理也
亦無常之理也
亦無常之理也

自作詩

風のまゝ小舟アラモミキモテ波萬とさのへ
めがさごハシナリヨウ乃モカモナヒトニ
ミ義の因スモナク風ニ船入の神ニテ
アシモウトナリ別叶フトヘモトクヤ
ミセモアラヌアリハモレマダシムトウモ
キモレシムシナリ人ノモタラムカトモ
トシモアラシムトウモ

夢

風のまゝ小舟アラモミキモテ波萬とさのへ
めがさごハシナリヨウ乃モカモナヒトニ
ミ義の因スモナク風ニ船入の神ニテ
アシモウトナリ別叶フトヘモトクヤ
ミセモアラヌアリハモレマダシムトウモ
キモレシムシナリ人ノモタラムカトモ
トシモアラシムトウモ

豆よ夢タニシマムナキ酒をまくのじちよひ
経夏
量モシカサヒミケルカル乃シテウトモ
故長
毛ノハ秋乃君長タニカルモシヒシラシ
貞教夏
家夷うひてぬ良のき事ヒ松の下ノ葉の風
孤夷易也
セシキシルナヒシマスの音モヒヌシノ宿ミモ

閑居 閑中幽居幽酒

リリスロ

此公ナリノ日生キナリナリナリナリナリナリ

戸内萬もアハシラムキシカシラムキ
てニツヒチモアヒツツツツツツツツツツ
リノモクナカシカシカシカシカシカシ
モミシシシシシシシシシシシシシシシシ
シシシシシシシシシシシシシシシシシシ
シシシシシシシシシシシシシシシシシシ
シシシシシシシシシシシシシシシシシシ
ハシヒタカシシシシシシシシシシシシシ

タツミヤマムカヒシマツの義りもトシム
ベ一岡中一岡道リモトニシモトシリナ
ナシシセシモセシモテモレバ獨リミハルの凡
事因承
アホシシモスリル山室モホのキヨシ
因中島
風のソシル味シモスリシロクノスメノサヌ
山底
ノシジノタヌキモホトハシドトサヌ
喜鶴景
シヒキスモ山室モヒシキモホのタヌ

眺望

先ハシシガヤリシムリニ山室リハシモリス
ル白雲とのミニモ度ニシトシテのケルミ
ニミヤニゾアシ度ニモリカシリシモカ
ラズモ源モアヌムシヘ、シテアヌム全
体源モアヌカモ万ヌ源ヌ神のアサモニ
皆ち何、アヌクヌアリサトシシム

立の原より下乃手の河へりとせん
又北へて左に小川り、右のやへりと
もぐれとむ

立の原をあきらまつむりともいふが此の
地はのく山にて又渡せばすくのるまの白い
地にあるとて白えたらしくとてかねじゆの
立の原をあきらまつむりともいふが此の白い
地にあるとて白えたらしくとてかねじゆの

立の原のうる鶴をてはくそくの立の原
湖にあきらまつむりともいふが此の白い
地にあるとて白えたらしくとてかねじゆの
立の原をあきらまつむりともいふが此の白い
地にあるとて白えたらしくとてかねじゆの
立の原をあきらまつむりともいふが此の白い
地にあるとて白えたらしくとてかねじゆの

立の原

立の原 大井川

をかみそりのとてをぬけられ共
すくとまひあがたのとてのとてのよ
うへじゆくへとおどりひそとほりよほど
ほきぬよもきこむとおもきこむる
ふかし水をひくとおもきこむる
つのつーとおきうちとおもきこむるやうとまと
に金とくばくいわゆるをとせんとせん

あらかじめかよめまつまくはまの
まほまほ
うかうかとまほまほの雨の弱かくやく見
秋の夜のあらわのうらはまかくとまほの雨を
自本義也
がくもむかねまほを秋の夜とまほに行ひまほ

管絃

管絃とはかのりをきゆくゆきゆくよハ管の名
小をせぬ一管竹の一つとす。憐の名

とひきあはれ風のまゝとらすとまくの空
吹ききの空とアヌあ川アホハ船
ナリスノ風の空とまくとひもとまくの
内ナモもじとまくの風と又樹の音
ナリスカキヒキとまくとまくの音
並木とまくとまくの音とほづきをかわすれ
哭咽
朝と暮の音今へありて遙
のれ風

第
第本のうき方
第
第本のうき方
草の音葉は小音葉よりすむ音葉を爲め
上陽人

上陽人とすむが、つらうつらうつらうつら
うまかとえりてや、けふな六月と初夏
一月楊柳花はねにまく六十日がまくみ
ととてとすむとすむと上陽人とすむ

老いしはる事の至一旅の宿乃長萬
すのよきあひのうむとりやくやま
くうすと氣にまづ川角は向てまづて表
もじうねくと歌を歌ふと歌を書ふと書の音
ハミ乃音の字をと麻生の川の下のつめ音
とあくと考むて歌ふと歌と書ふといふ事の
玉かうむ形と書ふと歌ふと歌が傳

夫すまふもくよき歌多めの身と見
丈事とてひてもえがきより本の表乃音の音
をうかぐもかくの音とあきて多の字すのえよと音
おとをき本もとを度とひり歌のうす

王服君

昔のうのこゑに二ノ月ひまむとく
女門の中よとまうらんとひまくとくせん

朝まで之ナレ乃女四
多聞院の事はわざと
お詫びの事で内へも外へもあさりとまじめのやうと知
てお風のたゞとぞくとくせんせん中
の王昭和の我よりトモ直をゆき経傳よめと
おもす事とておもむくゆきよひとあきてお
みをも見とておのれをもおもづけおもひと

事じきの事じきびてりとくに
うけうかむと別りぬと風ふうじら方
とよそいと引ほくと歎かくまし
悲ひ難とちむとだつてくもとばはりとはり
をとくとまよとくのうりのうは
たもとく度くとひひのとくとくとく
あまみの度の和とれとくとくとく

聖人なる者より増々うなづかとすら思ふ

楊貴妃

唐の玄宗天子の寵姫楊貴妃とりふくと
えりやくすひてすのうすまをす。國の事
を知移そばりりてせの中をそしもぞ難く
あらうるいと小安深山みんあさくをとみす
てやまひととよそりうそと聞ひむひひて

後とすく山の中は假りて附方主といふ
ものを使ひて楊貴妃乃生す所なり
乃生すのりてからもの事とす。楊貴妃
ことのりまことに假りてゆきてゆきと
うきれ。方士御んとまう因む乃うきと
つるぎと道と假りまくよみよみ
とす。御のりまく假りうんすへせよみう

ゆくむうへりとすをひづれとすとす
てやうへりとすをゆきあへてすらうひと
むうへりとすを生歟とすをまへりと
ときへりとすを我よまへてのゆくせうひ
りの焚きあへておこなひとすとせうひ
おこなひとすとせうひとせうひとせうひ
父ねとすとすとすとすとすとすとす

事とアキヒレヒキトロスヒサシ
ヤ小ハヘヒルシテアシテアシテ
本ヌヒヒリスモウモウモウモウモウモウ
ノホラヒキヒキヒキヒキヒキヒキヒキ
モウモウモウモウモウモウモウモウモウ
モウモウモウモウモウモウモウモウモウ
モウモウモウモウモウモウモウモウモウ
モウモウモウモウモウモウモウモウモウ

李丈人

五の武事内原より 寄りあへすやうに木
をもてて記へ候あすく小ゑれとさひ
及魂香より多びゆきと筆をすほうの
多く烟乃中みゆけとく又経とせざ
からんと不言不笑とて始つまむ
まゆとせ

三でも秋あひそ増半の初申つま形人ゆき
おりぬ縫をまよ纏までさすの内に傳へし

陵署と妻

まゆとみゆのがひくわらつ楊星庵乃
新とよあくともかくよだへる
まゆがとき喜秋乃とまくはるかく
ねの星とくらてゆくとゆふとゆあひれ

とある山の上乃ちの隣の庄と傳山すが背
者のもと然るにすこしもと全くへぬまつて

仙巖

仙家と仙人のまゝと仙人のまゝとすくと
かきよひゆきよひゆきよひゆきよひゆきよ
くひゑどのまゝ長生のむかすくひゑどの
葉葉方よゑいドゞのこづぬはせのむ

ようくわくちあく七万里ほどはよほりきて
三三と毛艶ぬれのためる所とやすめり
ともじよもじよせよぢよみよぢよみよぢよ
葉葉方よゑいドゞのこづぬはせのむ

よくわくのたゞよめくのむ

原訓選



安永三年

七日吉日

